

## はじめに

これは新しい種類のアウトドア本だ。ここには、見知らぬ場所で進むべき道を探すときに役に立つ道具となる、自然を利用した方法がまとめられている。陸でも海でも、必要なら地図やコンパスを使わなくても、読者が観察力を駆使し、自然のしるしを読みとる方法を知ること、正しい道を見つけられるようになることがこの本の目的だ。

自然<sup>ナチュラ</sup>をもとにしたナビゲーションのための手がかりや道しるべを、自然は数えきれないほど残してきているのだが、現代人はほとんどそれに気づかないし、そのための知識も持っていない。クロノメーターやジャイロコンパス<sup>\*</sup>、電波探知機、自動操縦装置といった科学技術の産物があるいまでは忘れられているが、大昔の未開民族はそうした道具をいっさい使わなくても、たやすく原野を抜け、広い砂漠や

\* 訳注 primitive peoples (未開民族) は文字を持たない民族に対する偏見に基づく用語であり、今日では使われて

いないが、本書の古典としての価値に鑑み、そのまま訳語としている。著者自身はそうした民族に対する偏見はなく、ときには彼らの優秀さを知らない文明人への皮肉をこめてこの用語を用いていることはお読みいただければわかるだろう。

海を渡ることができたのだ。この本がほとんど失われてしまった技術を取りもどし、読者が自然を頼りに進路を決めるための実用的で確実な知識を身につける一助となることを願う。

わたしはこの35年間、仕事の一環としてナビゲーションの研究をしてきたが、その対象には現代の方法だけでなく大昔の未開民族が用いていた方法も含まれている。このうち後者について調べていくとすぐに、現代のような航法を持たない昔の探検家たちはおおむね、身のまわりの自然を観察し、その意味を読みとることに頼っていたことがわかった。西洋の探検家だけでなく、ポリネシア人やアメリカ先住民、オーストラリアのアボリジニなどの開拓者も同様だ。そのほかにも現代の科学を知らない多くの民族が、自然のしるしを観察し、読みとく技能だけを用いて原野を越え、大海を渡って長距離を旅するという驚くべき能力を發揮してきた。今日でも、それと同じ方法で進路を導き出すことは、見るべき対象やしるしの読みかたを知っている人にとつては同じように効果を發揮する。

ナビゲーターとしての仕事のなかで、あるいはその他の場面で、わたしはこの本に書かれた方法を試し、実際に使えるものであることを確認してきた。多くの章に分かれているのは、世界中の数多くの場所で開催したさまざまな条件を記述するためだ。ここに述べた方法の多くはほかのアウトドア本には見当たらないだろう。野外でさまざまな活動を行う読者の役に立つことを望んでいる。

この本を効果的に使うために、いくつかの注意事項を頭に置いてほしい。世界中のいろいろな場所について述べているが、あらゆる地域について詳細な説明をすることは、一冊の本にできることではない。ここに挙げた例は特定の地域のいくつかのケースに当てはまるものだが、また同時に、どの読者もそこから自分の住む地域について知ることができる。この本の一般的な提言の多くは、地域の特性に合わせ

て読みかえ、それぞれの地域に適用できるものだ。

これらの方法を使って、身のまわりの自然物に残された跡を観察し読みとるさいに覚えておくべきは、困難な状況ではひとつの観察結果を信頼しすぎてはいけないということだ。それは原則の例外である可能性がある。いくつかの異なった痕跡が一致して示していることこそが、それぞれの痕跡から個別に引きだされる結論を強め、たしかなものにさせる。

また、この本に書かれた方法があれば、地図やコンパスが手元にある場合でもその代わりになるといふことではなく、それらを補助するものだということも強調しておくべきだろう。地図やコンパスの使用にかたについては、アウトドアに関するたくさんの本やマニュアルで扱われており、この本の対象からは外れている。また原野や海で遭難したさいに食べ物や水を得たり、避難場所を見つけるための方法もこの本には書かれていない。そうした内容ならば、すでに十分な説明が載った書籍が軍から発行されている。

太陽から方角を知るための、年間の、赤道から北緯60度、南緯50度までを網羅した太陽方位角の簡易表が巻末に添付されている。データをコンパクトにまとめ、一般的なアウトドア愛好家が実際に使えるように、この本のために特別に作成したものだ。これまでに作成された専門的な太陽方位角の表は詳細で分厚すぎ、訓練を受けたナビゲーターや測量技師だけが持っている専門的な知識がなければ使うことのできないものだった。

この本は自然に分けいって本格的に探検をする人のためだけに書かれたものではない、ということも言い添えておきたい。わたしの経験では、自然を頼りに道を見つけ、自分の位置を知るための知識があ

れば、家の近くでも世界各地の遠く離れた場所でも、単調になりがちな田舎歩きや船旅の楽しみが大いに増すものだ。だからこの点でどんな状況にあっても、読者諸氏がこの本を用いて身のまわりの自然を理解し、読みとること、より多くの楽しみを得られることを願っている。

1957年8月

フィジー諸島カタファンガ島

ハロルド・ギヤテイ

# 1 自然は導く

「あの人はすばらしい方向感覚の持ち主だ」。わたしは真面目な人々が口癖のようにこう言うのを何百回、あるいは何千回も耳にしてきた。彼らは単純に心から信じて、性質の面でも働きから考えても曖昧でかなり説明しがたいこの謎めいた能力のことを語る。なかにはしたり顔でうなずいて、方向感覚はふつうの人々（そして多くの動物たち）が持つて生まれた五感とは異なる特別な感覚、つまり第六感なのだとほのめかす人もいる。

わたしはそのような第六感的存在しないと考えている。方向感覚の優れた人というのは、単に進むべき道を探すのが上手な人、つまりナチュラル・ナビゲーターなのだ。彼らは豊富な経験と知性によって発達した（目で見、耳で聞き、舌で味わい、鼻でかぎ、皮膚で触れるという生まれつきの）五感を使って正しい道をたどることができる。必要なのは感覚と、自然のしるしを読みとるための知識だけだ。

観察し、読みとることのできる自然のしるしや道しるべは無数にある。それらを使えば、人里離れた誰もいない場所で、陸でも海でも、必要ならば地図やコンパスを使わなくても進路を導きだすことができる。自然にはいつも理由がある。この本のおもな目的はその理由を読みとり、それを使って道を探す

ための助けとなることだ。

巧みに進路を導きだすことができる人は、その技に習熟し、ふつうの人を驚かせるほどになる。もし謎めいた存在でいようと思えば、自分には第六感があるのだと友人たちに言って、それを信じさせるのも簡単だろう。だが正直でありたいと思うなら、そのようなものはいっさいないと認めなければならぬ。

多くの人が目と耳、鼻、味蕾、そして感覚を備えた皮膚を持って生まれくる。もちろん、生まれ持った感覚の鋭さは人それぞれだ。人はみな感覚器官を本能的に使う。つまり、誰に教わらなくても、感覚器官そのものの働きに沿ってそれらを使う能力が生まれつき備わっている。ただしそれが上手な人であれば、そうでない人もいる。しかし、経験や練習によってそれを発達させる力は誰にでも与えられている。感覚をどのように使うかについては、子供のころの環境によるところも大きい。都市生活者の多くは話し、読むことができるようになればさほど真剣に道を探す必要はなくなるが、田園や森の住人、漁師、船乗りなどはまわりの自然にしっかりと親しまなくてはならない。

ますます都市化していく文明のなかで、自然のしるしを観察し、読みとる必要性は少しずつ消えつつあるように思われる。それが生死に関わることは、いまではそれほど多くないからだ。しかし、必要不可欠ではないものもなくなっていいわけではない。音楽や絵画、バードウォッチング、トボガン〔北米の先住民族に伝わる木製のそり〕、その他の純粹芸術や科学、スポーツでもそうだろう。自然のしるしを読みとることは、地理や数学と同じように学校で教えられるし、またそうすべきだ。自然のしるしから進むべき道を探すことそのものも、誰にとっても重要なことだ。だがそれ以上に、自然のしるしを使う訓

練を受ければ、実際にナビゲーシオンをする機会はめったに訪れないにせよ、身のまわりのたくさん自然物を楽しめるようになる。自然を観察し、その細かな変化や特徴に気づく習慣は、適切な訓練と練習によって簡単に身につけられ、それがあれば意識的な努力をしなくても驚くようなことができるようになる。

偉大な芸術家、作家、ナチュラリスト、科学者、航海者、探検家、詩人、開拓者たちにはひとつの共通点がある。外部世界に興味を持ち、世界をひとつひとつの部分へと分解してから組みたてなおすことによって、この世界で生きる人類に創造的なものをもたらず能力だ。観察力や、はじめは取るに足らないように思える小さなことに目を向ける能力は、のちに驚くほど重要になり、深い意味を持つ。小さな観察から、大きな発想が育ってくる。感覚の使いかたを訓練し、感受性を備えた精神は膨大な観察結果を蓄えていて、やがて時が来れば、そうして集められたものすべてがまるで一編の傑作小説のように結びつき、魅力的な模様を織りなして新しいものをもたらしてくれる。

ギルバート・ホワイト「イギリスのナチュラリスト。(1720-1793)」やチャールズ・ダーウィン、あるいはほかにも多くの偉大なナチュラリストが、若いころに自然のなかに分けいつて長い時間を過ごしていたが、友人たちには、それはなんの目的もない活動だと思われていたにちがいない。ダーウィンは両親や教師たちに怠惰なのではないかとひどく心配されていたが、彼がいつも静かに蓄積していた観察は何年も経ってから花開き、すべてがつながって19世紀最大の科学的アイデアを生み出した。誰もがダーウィンのようになれるわけではないが、進んで自然に分けいつたり、眺め、観察し、生まれ持った感覚を磨き、思考をうながし、想像力を刺激し、創造的な能力を目覚めさせるためだけに散歩をすること

は誰にでもできる。時間を無駄にすることをあまり恐れずに目で見、耳で聴いていると、あらゆるものが深い意味を持つようになる。

ボーイスカウトの初代総長ベーデン・パウエルは、視覚と聴覚をもとにした行動体系を作った。「スカウト活動」と名づけられたこの活動は世界中に広まった。わたしは旅暮らしをし、この本の題材を集めているあいだに、幾人もの生まれつきのスカウトと知りあった。また、理論や知識に関して切磋琢磨するなかで、研ぎすまされた観察力を持つ驚異的な人物に数多く出会った。紙幅の関係で、ここではそのうち、たがいにまるで異なる三人を挙げておこう。彼らの能力は、訓練や生まれつきの好奇心、あるいは長きにわたる経験や実践がいかに大きな力になるかということを示している。

1949年の夏、フィジーにいたわたしのもとを著名なアメリカの鳥類学者ロバート・クッシュマン・マーフィー博士が訪れた。海鳥に関する世界最高の権威者だ。わたしがはじめて彼の鳥類学に関する能力を知ったのは、魅力的なその妻とわたしを連れて、船からフィジーのわが家まで6・4キロメートルの距離を、おもにスバの街のなかを通って車で来たときのことだった。現在、フィジーにいる鳥の種類はそれほど多くない。フィジーに生息する鳥について最近発表された一覧表があるわけではないが、エルンスト・マイヤー博士の *Birds of the Southwest Pacific* 「南西太平洋の鳥」を読めばわかるように、スバ近郊の庭や田園でまる一年過ごしても目にすることのできる鳥はおよそ33種にすぎず、より内陸へと入り、深い森や丘に登ったとしても数種増える程度だ。道中は話が途切れることはなかったのだが、家に着いたときマーフィー博士はこう言った。「船を下りてから11種の鳥を見ましたよ」。つまり、一年間暮らしたとして見ることでできる鳥のおよそ3分の1だ。この偉大な科学者は、ほかのことを話しなが

ら鳥を観察し、種を識別することができると訓練されているのだ。

ふたり目は、訓練された観察者でなくても、自然への興味によって見えてくるものがあるという例だ。わたしの妻はオランダで育ち、人生のほとんどを都市で、とりたてて自然を用いて進路を決める必要もなく暮らしてきた。この本の調査のためにわたしとともにヨーロッパと北米全土を旅したのだが、あるときわたしが取り組んでいた主題である、植物や樹木から方角を知ることにとりわけ興味を示し、2カ月の旅のあとサンフランシスコに着いたときには、ホテルの部屋の窓から外を見渡すだけで方角を判断することができるようになっていた。

その窓はユニオン・スクエアに面していた。広場には一本の木があり、四つの辺はヒナギクで囲まれていた。妻はすぐに、東、南、西のヒナギクが咲き誇っているけれども、北側は咲いていないことに気づいた。木で日差しが遮られていたためだ。

そして最後は、実践の成果だ。リチャード・I・ドッジ大佐は著述家として、またアメリカ先住民に関する権威として知られているが、著書 *Our Wild Indians* 『わが国のインディアン』のなかで、必要が探検者にもたらした最高の経験を示す文章を書いている。

距離が1マイル〔1.6キロメートル〕であれ100マイルであれ、遠く離れた場所への行きかたを尋ねると、アメリカ先住民はただその方角を指さす。ちゃんとした答えをせがむと、もし行ったことがある場所ならば詳しく説明することで、もうひとつの驚くべき性質である陸上の目じるしに対するすばらしい記憶力を披露してくれるだろう。

訓練されていない目には似たような変化のないものに見えるが、丘や谷、岩や茂みのそれぞれが彼にとつては異なつた特徴を持ち、一度見たものはずっと忘れず、何気なく移動しているように見えて、その特徴はひとつとして忘れていない……。自分が知らない土地を旅することになると、そこを訪れたことのある戦士に相談する。そのさいに旅を成功させるために必要なことのすべてを、ひとりが明瞭に述べ、もうひとりが理解するさまはまさに驚くべきものだ。

わたしには、はじめは海の、のちに空のナビゲーターとして35年の経験があるということは、本書の早い段階でお伝えしておいたほうがいいだろう。また長いあいだロサンゼルスでナビゲーションの学校を運営し、その後アメリカ空軍でも教えてきた。そのころつねに生徒に強調していたのがナチュラル・ナビゲーションの重要性だ。当時もいまも、それは教科書には載っていない。一般的な航空術では、当然ながらあらゆる種類の道具や機材、そして地図が使われる。生徒たちに伝えていたのは、現代の機械による補助だけに頼るのではなく、下に広がる土地を自分の目で記憶にとどめる必要があるということだ。

1931年に世界一周旅行をしたあと、わたしはまだ存命だったワイリー・ポストと5カ月かけてアメリカの各地をめぐる旅に出た。ウイニー・メイ号は合衆国全土を飛びまわり、平均しておよそ一日にひとつの町を訪れた。ワイリー・ポストが操縦士、わたしがナビゲーターを務めた。飛行中、わたしは眼下の土地について、とくにそれまでの地図や航空図には記されていないことをよく知ろうとした。たとえば植生、農作物の種類、農地と、そのどこに建物があるか、家屋や納屋の構造、干し草や穀物の山

の形、柵や農地の境界線の形態など。

家から立ちのぼる煙、樹木の曲がりかた、霜で白くなった葉の裏面など、風向きを知るための材料はたくさんあった。また、月曜日には洗濯ロープを見れば風の向きを他の曜日よりも簡単に判断できた。世界のどこでも、月曜は洗濯の日と決まっている。またこうした細かい部分を観察することで、地方にはそれぞれ、ほとんど独特のしるしとも言えるような特色があることを知った。たとえばオハイオ州の農地では小さな納屋までほぼすべての建物に精巧な避雷針が設置されていた。驚くべき数の針が州内のどこでも建物から突きでていた。隣接する他州と比べて、オハイオ州は雷がよく落ちるといっわけではない。販売会社にも口のうまいセールスマンがいたためにこのような痕跡が残っているのだろう。

もちろん、大陸を横断する飛行機の上から、国土の特徴が変わっていくのを観察するという幸運に誰もが恵まれるわけではない。最初の数回の飛行で、わたしは意識して見るこの価値をはっきりと理解した。またごく短いあいだに、アメリカ合衆国のほとんどの場所、地図を使わずにその地域性に気づくことができるようになっていた。

だが、かならずしも快適な自宅から外に出なくても田園部のこうした特徴を読みとることはできる。さしあたって飛行機や鉄道、あるいは車のなかから景色を見ることができないなら、写真を観察すべきだ。風景を描いた絵を、解説を隠して細かい部分まで観察するのはとても楽しいことだ。練習をすれば、細かく観察することで、直接よく知らない地域について写真から多くのことを判断できるようになる。

素人のインドア自然探偵は、E・A・グートキントの *Our World from the Air* 『空から見た世界』など（イギリス社会学協会の後援により）出版された航空写真集を見て、有意義な時間を過ごすことができるだ

ろう。次ページの素描は、写真に基づいて描かれたブリテン諸島のどこの風景だ。かりにこれ以外のことを何も知らないとしたら、観察からどんなことが読みとれるだろうか？

丘の中腹に見える自然のおおまかな様子から、この写真がイングランド中央部、南部、あるいは東部で撮られたのではないことは明らかだ。

建物の構造から、場所はイングランド北部である可能性が高いだろう。

植物の状態からしておそらく季節は春の初めだ。

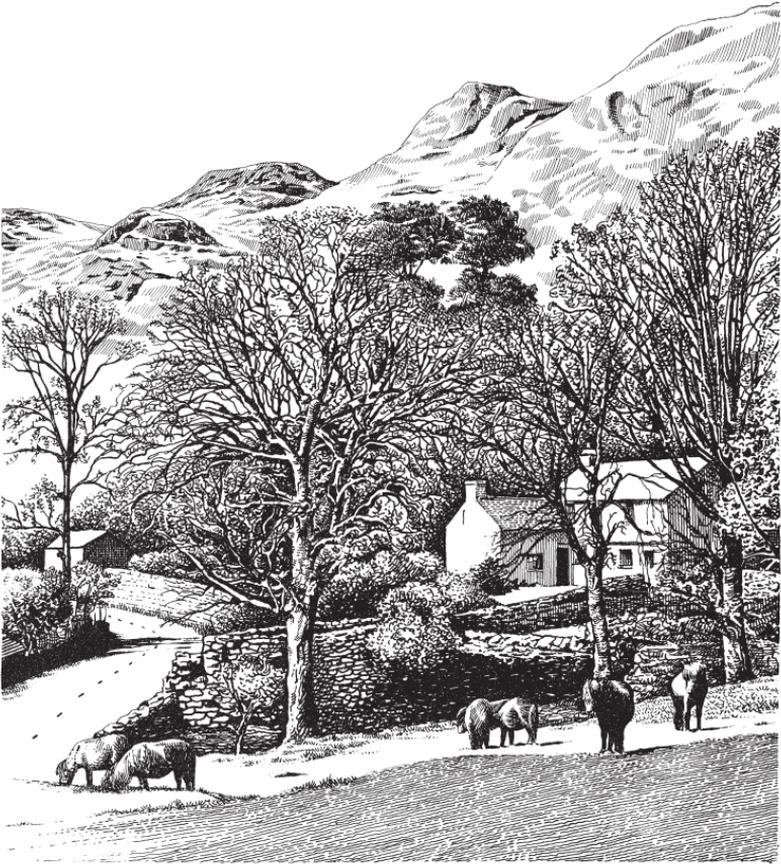
家屋の主要部分はリビングルームを暖かくするために南向きになっているはずだ。まずはここから、この絵の向きに関する最初の推論を引きだせる。

影の長さや方向から、さらにこの写真が撮られたのは正午ごろで、影は北向きだと推測できる。ということはこの道はおおむね東西に走っているはずで、この絵の前景が東の行き止まりになっている。

木の形から、影と建物の向きによって判断した南北の方向が裏づけられる。それがわかるのは、南側の枝はしっかりと陽光を確保するために水平方向へ伸び、北側の枝は垂直方向へ伸びる傾向があるためだ。また南側のほうがより枝が茂っている。

言うまでもなく、シエトランド・ポニーは場所についての判断材料にはならない。シエトランド諸島のなかよりも、その外のほうがシエトランド・ポニーの数は多い。しかもそこではほとんど木が生えず、わずかに生えるものも高さはせいぜい6から9メートルで、建物や丘陵の植物の状態もこの写真とはかなり異なっているため、この写真がシエトランド諸島で撮られたものであるとは考えられない。

わたしはよくこうした写真分析ゲームをする。解説を見ずに写真がどのものを当てることで興味



この絵の分析をすると、地方、季節、時間、そして家が建っている向きがわかる  
(雑誌 *Coming Events in Britain* 掲載の写真による。イギリス旅行休暇協会提供)

は深まり、認識や推論の力を高めることができる。そのとき、写真は写真であることをやめ、物語になる。

わたしたちは娯楽としてこの写真ナビゲーション・ゲームをすることもできるし、実際に探検をして楽しむこともできる。人類の祖先にとつてはこうしたことはゲームなどではなく、生きるために必要なものだったことは忘れられがちだ。実際には、西洋文明に住むほとんどの人の祖先は、かなりよいナビゲーターではあったものの、あらゆる未開民族のなかで最も優秀だったとは言いがたい。自然とともに、自然を利用して暮らし、探検者として画期的な偉業を成し遂げたのは間違いなくポリネシア人であり、オーストラリアのアボリジニであり、アメリカ先住民だった。彼らはたびたび、この章の冒頭で取りあげた謎めいた「第六感」や「土地勘」、魔法のような「方向感覚」があるとみなされてきた。すでに述べた（また、このあともしつと述べることになる）ことだが、これらの未開民族は、それにどんな人間のナビゲーターも、知られているどんな動物のナビゲーターも、これまでに物語や学問のなかで述べられてきた五つの感覚、すなわち視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚のほかには何も使っていない。もし六番目の感覚があるとすれば、従来の五つとは異なる感覚、あるいは少なくとも五感とはどこか独立した感覚になるだろうが、それは時間感覚だろう。それはおそらく「体内リズム」によって、あるいは少なくとも太陽の動きを観察することだけを判断材料とせずに、経過した時間を正確に感じとることができる能力だ。時間感覚については、またのちほど述べることにしよう。

原始時代の偉大なナビゲーターたちは、ただ自然をガイドとしていた。その発達した鋭い観察力について語るのにいちばんいい例は、古来の追跡の技法だろう。もちろん追跡にはナビゲーションやオリエ

ンテーションそのものは含まれない。それは人間や動物による移動を、その経路に残された痕跡やしるしから再現することだ。広く知られているように、あらゆる未開民族のなかでその技能が最も高いのはオーストラリアのアボリジニだ。その能力の高さは単に視覚などの感覚が鋭敏なためではない。アボリジニの感覚がかなり高度に発達していることは間違いないが、その信じてみたいほどの技術はまた、訓練と知性、推論の能力によるものでもある。アボリジニの優秀な追跡者はブッシュクラフト（自然の中で生活する技）や動物と人間の習慣について熟知している。また断片的な観察をまとめ、そこから推論する能力が高い。最小の労力で、ほとんど間違うことなく獲物の居場所を突きとめられる。

以下に、A・T・マガレーが1897年に発表した論文から、アボリジニのすばらしい訓練過程に関する説明を引こう。

植物もまばらな荒野に住むオーストラリアの子供たちは、母親が頭に乗せて運ぶゆりかごを出るとすぐに生き物を追いかけて、捕まえはじめる。少しずつ上達すると、甲虫、クモ、アリなどが地面に残した繊細な跡をたどるようになる。こうした訓練は成人するまで続けられる。そしてやがて、地を這うヘビや飛び跳ねるワラビー、あるいは巧みに潜んでいる危険な敵などがつけた跡を、あらゆる地面のしるしを見て記憶にとどめ、解釈し、状況しだいですそれをたどったり、避けたりすることができるようになる。その何も見逃さない目には、できたばかりの明瞭な跡や、突きでているが、誰かがそれを踏みわけてすばやく通りすぎた形のついた草の葉といったひとつひとつが、それぞれのしかたでそれぞれの物語を伝える。

オーストラリア大陸の广大で乾燥した地域に暮らすアボリジニはみな、一般のヨーロッパ人では気づきもしないような跡をたどることができる。ただし、幼いときから訓練され、つねに技術を磨いているとはいえ、その能力には個人差がある。見分けづらい跡をたどることができるのは、秀でた技能を持つたひと握りの者だけだ。

進路を探したり追跡する能力の差は、もちろんあらゆる人間の集団のなかに存在する。西洋文明では、道を見つけ、自然の跡をたどる能力は（軍隊やボーイスカウトでの経験がなければ）ほとんど発達していないため、たとえ素質には差があっても、自然のしるしを読むやりかたの初歩を身につけただけで、知性は高いが経験がないという人を上回ることができる。上回るどころか、頻繁にその相手を感嘆させることができるだろう。西洋人のうち突出した知性を持たない者でも、わずかな練習をするだけで、自然のしるしを道路標識と同じように間違いなく読みとれるようになる。

上達のための練習はいたって簡単だ。初心者とはとにかく歩くこと。できれば独りで歩くのがよい。会話をすると気が散り、集中が妨げられるからだ。経験を積んだ探検者は目の前のことだけを意識する。考えるのは、ただ外の世界のことだけだ。心の内側の問題を解こうとしたり、空想にふけりながら歩いていては、ナチュラル・ナビゲーションを習得することはできないだろう。わたしは初心者に対して、観察力を高める練習を始めたばかりのころは、決してあれこれ覚えようと張りきらないようにと言葉をかける。目ざとく追跡をすることができたり、自然を細やかに観察できる人の記憶力が優れているのは、長年の経験の賜だ。初心者は鉛筆とノートを持ち、土地の特徴や目じるしになるもの、またそれらの結

びつきを描きださなくてはならない。経験の浅い人は驚くほど色のことを忘れてしまう。絵画やカラー写真についてきちんと学んだことのない多くの人の意識は、白黒なのではないかと言いたくなるほどだ。ふつうの人は色よりも形のほうにずっと意識が向いている。変わった形の岩やねじれた木の幹を、特徴的な色をした樹木よりも心にとどめる傾向がある。また初心者はいざしば、場所には独自の音やにおいがあることを忘れて、感覚のなかで視覚だけに頼ってしまう。不思議なことに（少なくともわたしの経験では）、音においては意識的な記憶よりも、無意識の記憶にすばやく刻みつけられるものだ。

自分の足跡をたどって戻るためには経路を逆から見ることが必要なのだが、初心者の多くはそれができない。わたしはよく、往路でときどき肩越しに振りかえって地図や目じるしどうしの位置関係スケッチする練習をするように忠告したものだ。このように意識の半分は復路のことを考えながら移動することを、わたしは「アリアドネの糸を持つ」と呼んでいる。未開民族にうまく探検や追跡ができるのは、方法があるからだ。障害物の迂回路やジグザグ、曲がり角があると、あとで逆にたどることを見越してごく自然にそれを記憶している。

未開民族のナチュラル・ナビゲーターは、目じるしと自分がどれくらい離れているかをたいは距離ではなく時間で測っている。しかし西洋人は、地図で距離を判断し、計測することに慣れており、また自然な時間感覚をなくしてしまっているため、距離で考える。自然を用いて移動するときには、できるなら出発点の近くの高い場所を選び、周囲の地平線を見渡して特徴ある自然物との距離を推定するとよい。四方それぞれの風景を細かく見て、その概形や山の輪郭、地平線のその他の形をよく観察し、覚える（もし覚えられなければ、スケッチする）。それから意識を東西南北に続く地面に向け、土地の種類や

優勢な植物、丘の形、谷や川の方向、建物の構造、そしてそれらすべてのあいだの部分や、いま観察している場所との関係を意識する。このように心のなかで地図を描く習慣をつけると、上達すればしたいにノートに書きとめる必要がなくなってくる。ついには小さな丘や石、木々、茂みなどをごく簡単に、適切な順番で覚えられるようになり、それらがつながりあって記憶に残る。

観察力に関するわたしの結論を述べるにあたり、苛酷な状況から脱出することができたある人物の例を紹介しよう。

およそ50年前、山岳ガイドのイーノス・ミルズは雪盲になり、ロッキー山脈の大陸分水嶺の山頂で道に迷った。そこは標高3600メートルの地点で、いちばん近い建物でも険しい尾根の何キロも先だ。そのときに実際に自然物を観察し、それを巧みに使って進むべき道を見つけたことが、およそ36年前の著書 *Adventures of a Nature Guide* 『ネイチャーガイドの冒険』で語られている。

それは自然のしるしを読みとれるようになることで、それらに気づく習慣がつくという優れた実例だ。ミルズは自然に対する鋭い観察力があり、迷ったときも道を探すことができるという冷静さと自信を失うことはなかった。彼はこの出来事についてこう語っている。「感覚は研ぎすまされた。命を落とすかもしれないなどは、まったく頭に浮かばなかった」。落ち着いて状況に対処し、その地域の自然のしるし——たとえば山腹に生えているマツの種類、樹皮、木につけられた道しるべ、こだま、ハコヤナギの木を燃やす煙など——を的確に読みとり、彼は生き延びた。

ミルズには自分が陥った苦境から抜けだせるという自信があった。雪が深く積もっていたためトレイルに頼ることはできなかったが、自分が移動してきたスロープを降りるための地図は、はっきりと心の

なかに描かれていた。それは雪盲の闇に囚われるまえに集めた記憶によってできたものだった。

長い杖を持ち、雪靴を履いて歩きはじめると、往路に自分で木につけてきたしを探した。腕を伸ばして木から木へと移り、樹皮を手で触ってしるしを探りあてる。方角の判断には木を使った。樹木の分布について調べるなかで、この地域では、東西に走る峡谷があり、南の岸に面したフレキシマツと北の岸に面したエンゲルマントウヒを運んでいくことを知っていた。そしてフレキシマツが自分の左に、そしてエンゲルマントウヒが右にあるということは、いまは東へ進んでおり、山脈の東側にいる。確認のため、足下の岩についた地衣類と木の幹を囲んでいる苔を調べ、その一帯にはすべての方向から光が射していると判断した。

峡谷の地形を知るために声を上げ、どの方角からどれくらい強いこだまが返ってくるか、またそれに対する反響に耳を澄まし、それをもとに、いま入りつつあるのは深い森に囲まれた峡谷の源だと考えた。夜になると、歩いているときに雪崩で埋もれそうになり、巨大な岩の塊や、地面に落ちた枝や葉が絡まりあって、前に進むのがいっそうむずかしくなった。

ふいに、煙のにおいがした。山の住民が調理用の薪として使うハコヤナギの煙だ。よい条件のもとで、鋭い嗅覚の持ち主なら3から5キロメートルほど離れたハコヤナギの煙をかぎとることができる。風上へと進んで森の外へ出ると、煙のにおいが強くなり、人の住居が近くにあることがわかった。通りすぎてしまうことを恐れて、足を止めて耳を澄ました。そのまま聴いていると、小さな女の子が優しく、もの珍しそうに彼に尋ねた。「今晚ここに泊まるの？」